

松本光太郎のエスニシティ論

田村紀雄

松本光太郎さんの急逝を知り、残念に思いかれの優れたエスニシティ論に一文を献じたい。1990年本学に就任されたが、私はその際の採用審査委員長を担当、松本さんの論文を精読することになった。いうまでもなく、松本さんは中国西南部を中心とする「少数民族」の文化人類学研究をしていた。私もアメリカ等の「エスニック集団」に関する社会学やエスニック・メディア研究を続けていたための仕事であったと思う。それに、私も前橋市で生まれた。

論文審査結果をわたしから教授会に報告したのだが、かれの研究は壮族の歴史、移動、生活にかんするものだ。壮族は中国の有力「少数民族」のひとつである。漢族との接触のなかで、アイデンティティをかえてゆく。これは壮族にかぎらない、歴史的にこの大陸で「少数民族」は変化を余儀なくされてきた。ここで「少数民族」とは何か、どう形成されるのか、という問いに達する。

アメリカの先住民（いわゆるアメリカ・インディアン）は国勢調査で一時は30数万人にまで減少した。しかし公民権運動やアフマティヴ・アクション政策の中で人口急増がみられた。2000年のセンサスではおよそ205万人になった。人口増には自然増（出生による）、社会増（移民など）があるが、アメリカ先住民に自然増はあるが、大量の移民など考えにくい。センサスでそれまでの「白人」と申告していたのを、「先住民」と回答を変更した結果の人口増である。

要するに、アイデンティティの変更である。松本論文を読んでいると、政治や社会の変化で「漢族」から「壮族」に自己認識を切り替えている。中国共産党の反右派闘争などの時期、漢族と名乗っていた方が安全だった。このようなエスニック集団の人口増をわたしは「文化増」と定義した。中国は、「民族自決権」を封じ、「民族自治」の州や地区を作るべく「民族識別工作」で55個の「少数民族」にまとめられた。国家による認定による。1953年には400個もの「民族」が登記されていた。自治地域も切り取りや再編成が繰り返された。「少数民族」を国家がとりきめるのも不思議なはなしである。

「少数民族」といっても、時代と社会体制によって異なる。かれらが自己をどう認識するか、というエスニック・アイデンティティの問題だが、それも社会環境によってそれが形成されなかったり、発露しなかったり、政治的に否定されたりしたのだ。20年前、松本論文を読んで以降、かれの業績に眼を通してきて、研究対象が社会体制を異にする中国からラオス、タイなど東南アジアに移り、成果を注目していただけにその中断は残念である。

日本は ODA の一環としてラオス山間部の集落へ数百の無線局や通信機器を無償提供してきた。わたしは、その効果測定のため数人の本学の院生と共同で奥地のモン族調査を実施したことがある。ベトナム戦争後、数十万人のモン族がアメリカに亡命した。ベトナム戦争中アメリカの援助を受けて、「ホーチミン・ルート」を攻撃していたしっぺがえしをおそれたのだ。ここでも、多数のエスニック・グループがその形成、移動、生活、アイデンティティに、中国や、他国からの歴史、政策、文化での強い影響をうけていたのだ。